

天理日仏文化協会こども日本語講座の取り組み⑫

6) 外国で育つ日本人の子供たちにとっての日本語とは
日本語による子育て支援サークル「にこにこクラブ」

熱心な子供クラスのスタッフの取り組みが功を奏して、近年は定員以上の入学希望者があり、新学年度の受け付け日には、早朝から本校の前に行列ができるために、その対応が新たな悩みとなるほどの盛況を見せてもらえるようになった。

しかし、着任当時の生徒数は、全体的には増加していたものの、学年によっては登録者が少ないために、クラスが成立しないこともあった。そのために、スタッフ間では、従来の日系新聞に広告を出す以外に、効果的な生徒募集の方法はないかと相談を重ねていた。また、家庭で日本語を話す機会が少なかったために、入学しても教師の簡単な指示さえ理解できない子供たちのことが問題になっていた。そこで、無償で幼稚園科入学前の0歳児から3歳児までの子供たちと保護者を対象とした、日本語による子育て支援の場を、本校で定期的に提供することが、長い目で見れば、生徒募集につながるのではないかと提案して立ち上げた「にこにこクラブ」(日本語による子育て支援サークル)を紹介しておきたい。

2008年の春、生後間もない子供を持つ2人の布教師の夫人たちがこの提案に賛同してくれ、「たとえ母子2組からでも、においがけのつもりで始めよう」と、友人への声かけなどの連絡係を快く引き受けてくれた。平日の午前中に空教室の机と椅子を外に出し、マットを敷き詰めて子供たちへの安全にも配慮をし、月に1、2回の開催予定で、「にこにこクラブ」は始まった。子育ての先輩で小学校教師という立場から、日本語の歌やダンス、絵本の読み聞かせなどとともに、母親たちの子育て相談も行っているうちに、徐々に参加者が増えていった。

その後、2009年の4月に、夫がパリ郊外のアントニー市にある天理教ヨーロッパ出張所へ転勤になったために、開催場所を、出張所の地下ホールに移し、現在に至っている。会場が出張所に移ってからは、会の前後には神殿に参拝し、参加者が志をお供えしてくれるようになった。当初は、参加人数の制限をしなかったが、100人近くになったころから、子供たちの安全面への配慮に目が行き届かないなどの支障が出てきたため、あらかじめ15組30人前後までに参加者を制限して、事前の申し込み制とした。また、参加者同士がお互いに約束事を申し合わせ、片付けや掃除までも自主的に行っている。

今では、にこにこクラブ出身の子供たちも、幼稚園科から国語科へと進み、日本語を楽しく学んでおり、その弟や妹たちも続いてクラブに参加している。昨年の2月末からは、津留田きよみ氏(天理教ヨーロッパ婦人会主任、子供クラス講師)が、オブザーバーとなり、ほぼ毎月のように開催されている。メール通信によると、子供たちのために始まったサークルではあるが、外国で不安を抱えながら孤独な子育てをしている母親たちの心の支えになっているという声も多く寄せられている。また、クラブを通して知り合った「ママ友」の交流も盛んで、日本で助産師をしていた2人の女性が、文化協会の教室で「母乳育児の会」を立ち上げたり、同じ地域に住む母親が集まって公民館で子育てサークルを始めたりと、積極的な社会参加への契機に



子育て支援サークル「にこにこクラブ」

もなっている。また、出張所の行事である少年会のお泊まり会や餅つき大会、バザーひのきしんなどに参加する家族も増えてきた。

日本語を学ぶことは、日本人としての誇りを持つこと

さて、自らの小学校教育の経験から、「子どもへの日本語教育は、躰の徹底から」と考え、2006年から子供クラスのスタッフとともに関わってきた軌跡を辿ってきたが、最後に、外国で育つ子供たちにとっての日本語教育の意味について考えることにしたい。

毎週水曜日と土曜日の子供クラスの授業日には、子供たちや保護者たちで賑わうサロンとは対照的に、静かな図書室で、寝転がったり床に座り込んだりして、時間を惜しむように夢中で漫画や日本の読み物を読みふける子供たちの姿がある。新しい言葉や漢字などを学ぶことによって、日本語への興味も深まってくるのだろうか。そんな姿を眺めていると、これまで関わってきた「にこにこクラブ」や「子供クラス」のような外国で暮らす日本人の子供たちにとって、日本語を学ぶことは日本人の親とのつながりや言葉の学習というだけではなく、自分自身のルーツである日本人としての誇り(アイデンティティー)を自覚するという意味を持つのだと思えてならない。

また、昨今のインターネットの普及によって、フランスにいなながら、日本のニュースやアニメや歌、流行語などの情報がすぐに伝わるようになり、時差はあるものの、スカイプで顔を見ながら日本の家族や友達とも話ができるなど、日本を含む世界との距離感の縮まりも、言葉の学習効果を高めることになると思われる。

今後、本校で日本語を学んだ子供たちが、フランス社会の中でしっかりと根を下ろして成人して親となって、その子供たちを連れて再び本校に戻って来てくれる日もそう遠いことではないだろう。フランスを離れて1年余になるが、これからも外国で育つ日本人の子供たちへの日本語教育への支援を続けさせてもらいたいと願っている。